

男女共同参画の視点に立った地域づくり事業提案

報告書

薩摩川内市女性チャレンジ委員会

令和5年3月

目 次

1	薩摩川内市女性チャレンジ委員会地域づくり事業提案報告書提出を行うにあたって	
	薩摩川内市女性チャレンジ委員会第9期会長 内野 多津代	・・・ 1
2	講評	
	女性チャレンジ委員会アドバイザー たもつ ゆかり氏	・・・ 2
3	女性チャレンジ委員会学習プログラム	・・・ 6
4	私たちが提案する地域づくり事業	
(1)	薩摩川内市「働いている・働きたい女性」の広場事業 ～出会う・語る・学ぶ・・・に広がる共感と信頼のネットワーキング～ ＜パレットグループ＞	・・・ 9
(2)	ここから始まる♥ “虹色ベンチプロジェクト” 事業 ～ “寄り添い繋がる” その姿、支援の在り方を託して～ ＜彩雲グループ＞	・・・ 17
(3)	“共助の力を高める” 地域コミュニティづくりアップデート事業 ～各地域、各世代等を超えて誰もが尊重され、それぞれの思い、悩み、考えが言える ・声を聞いてもらえる信頼関係・共感関係のある場づくり～ ＜菜の花&Sunny グループ＞	・・・ 30
5	活動経過報告	・・・ 40
6	薩摩川内市女性チャレンジ委員会名簿（第9期）	・・・ 41

第9期 薩摩川内市女性チャレンジ委員会地域づくり事業提案報告書の提出を行うにあたって

平成17年4月1日に薩摩川内市男女共同参画基本条例を基に女性50人委員会として設置され、活動の更なる充実を図るため、平成27年4月に設置要綱が一部改正された女性チャレンジ委員会。第4期までは「市政に対する提言を行う」ことを目的とする、サービスを受ける側の視点に立つもの。第5期からは、サービスを受ける側であり、サービスを提供する側でもあるという双方の側に立ち、多様な生き方をしている市民一人ひとりの人権を尊重するために、行政サービスに頼るだけではなく、私達自身で何か出来るかを考えることを目的として「一人ひとりにより近くに在るからこそ、一人ひとりにより深く、寄り添うことが出来る…」だからこそ、「We Do!」（私達でする）を合言葉に話し合いが進められてきました。

今期私たちは、23人がグループに分かれ「チャレンジ委員って何をするの」聞きなれない言葉に、「私にできるの?」と不安を抱えながら、話し合いの4つのルール「批判厳禁」「自由奔放（心の窓を開く）」「量を出す」「結合改善（閃き）」を念頭に置いて自由に意見を出し合い「対話」を重ね取り組みました。

人口減少、少子高齢化、労働力確保など、多様化する社会課題に女性チャレンジ委員会の男女共同参画視点に立って【調査研究テーマの設定⇒現状把握のための情報収集⇒情報の点検（意見情報から事実情報への修正）⇒情報の分類⇒情報の分析⇒課題の抽出⇒課題解決のための地域づくり事業の立案】を2年という時間を費やして策定に取り組みました。特に自分たちの偏見や固定観念を捨て、しっかりとした根拠・事実を調べる作業は困難を伴い、その過程で「互いに認め合うことの大切さ」や「人への眼差しの向け方」など、多くの気づきと学びを得ることが出来ました。なお、第9期においては、コロナウイルスが猛威を振るう中、各グループでの自主学習は、なかなか人が集まる事が出来ず、リモート・グループライン等、それぞれのグループで工夫を凝らしここまで辿り着きました。

この度、地域づくり事業提案として3事業を提出致します。これらの内、パレットグループでは、現在重要視されている社会課題でもある女性活躍に関わる、女性の働き方についての初の取り組みとなっております。菜の花・sunnyの2つのグループは、共同学習で共助の力を高める地域コミュニティづくり、彩雲グループは寄り添いで繋がる支援の在り方など、地域共生社会の実現に向けた取り組みで、すでに活動を始めているグループもあります。

なお、今後活動をしていく中で、私たちだけではどうしても解決できない問題が生じた場合は、市担当課に相談させて頂き、協働することで解決していきたいのでご支援頂けますよう、お願い致します。

本報告書の作成にあたり、多大なアドバイスと寛大なお心でご指導を賜りました、たもつゆかり先生に深く感謝申し上げます。

毎回の委員会運営では感染予防等様々な配慮と貴重な学びの機会を設けてくださいました薩摩川内市関係各位の皆さま、誠にありがとうございました。

令和5年3月29日
薩摩川内市女性チャレンジ委員会
会長 内野 多津代

第9期「薩摩川内市女性チャレンジ委員会」の活動に寄せて

アドバイザー たもつゆかり

新型コロナウイルス感染症の状況が心配される最中での今期の活動は、全体会の実施が中止・延期されるなどの制約がありましたが、このような状況の中で、コロナ対策に十分に配慮しながら、委員のみなさんが、各グループでの自主学習を熱心に重ねてくださったことにより、活動の成果である「地域づくり事業」の提案に至りました。改めて、この2年にわたる委員のみなさんの真摯な活動に敬意を表するとともに、みなさんの活動の過程を通して、私も多くのことを学ばせていただいたことに感謝申し上げます。

「女性チャレンジ委員会」における学習課題

「薩摩川内市女性チャレンジ委員会」は、男女共同参画社会の形成に向けた基盤的課題である「政策・方針決定過程への女性の参画の推進」のためのポジティブ・アクションとして、地域課題の解決に向けた地域づくり事業を立案するための調査研究活動を通して、参画(意思決定への参加)に要請される力量形成を目指し、様々な学習課題にチャレンジしています。

特に注力するのは、各グループの調査研究テーマについての現状把握のために収集された情報を「人権・男女共同参画の視点」での徹底した点検を行うことにより、個人の尊重と男女平等を基盤とする**男女共同参画(ジェンダー平等)**について、**理念的な理解を超えて実感的な理解を深め、他者や、その置かれている状況への平等・公正な“眼差し”の向け方、を磨く**ことです。情報収集活動において聴取された当事者一人ひとりの声は、メンバーによって言語化され一つひとつの情報となりますが、この多くは、事実としての“である、状況に、それぞれのメンバーの価値観や無意識の思い込み(アンコンシャスバイアス)による“であるべき、意見が付加された“意見情報、となっており、この段階での**“意見情報から事実情報への修正”**により、まず、事実としての状況を平等・公正に捉えることが、調査研究の過程全体を通じた学習課題としてトレーニングする**論理的思考**の基本となります。

政策課題が多様化・複雑化・複合化する中、政策決定における女性をはじめとする人材の多様性(ダイバーシティ)は、立案される政策の質を高めるための必須要件であり、特に、一人ひとりの状況が、どのような課題として抽象されるか?“政策課題の認知、における**「人権、男女共同参画の視点」の深度**は重要です。

このように、男女共同参画のキー概念である**「ジェンダー視点」の感度を高める**ことを学習課題の中核とする「女性チャレンジ委員会」の活動は、メンバーの政策形成過程への参画により**「ジェンダー主流化」**を図る重要なアクションだと考えています。

また、年齢、居住地域、経歴等の異なる多様なメンバーによるグループワークを基本とする活動を通して、**合意形成を図るための対話(ダイアログ)のマインドとスキルの習得**を学習課題としていますが、意思決定への参加や、地域づくりを担う人材として期待されるメンバーが、多様性を尊重する対話力を高めることは、地域での話し合いなど身近な民主主義の深化につながることを期待されます。

講評～今期の特徴と全体的傾向

今期は特に、各グループとも収集された情報の量が多く、それゆえの混乱もみられましたが、できるだけ多くの一人ひとりの声を聴き留めようとするメンバーの熱意が感じられました。情報収集のために出会う一人ひとりの思いや状況への共感力の高さは、今期のみならず、「女性チャレンジ委員会」に参加するメンバーにも共通しており、これまでも、この「共感」に根差した、地域づくりや政策形成における「性別にかかわらず、一人ひとりの人権が尊重される当事者視点(「人権、男女共同参画の視点」)の重要性を示唆する地域づくり事業が提案されてきました。また、今期の調査研究の過程には、「人権、男女共同参画の視点」の深化がみられ、そのアプローチにより調査研究テーマに関する諸課題が包括される、インクルーシブな事業が立案されました。このことは、SDGsが理念に謳う「誰一人取り残さない」持続可能な社会の形成に向けた必須の要件とされる「人権、ジェンダー平等(男女共同参画)の主流化」に適い、コロナ禍の影響もあり人々がかかえる困難課題がより多様化・複雑化・複合化する中、今後さらに要請される、制度や組織等縦割りの壁を超えて、切れ目の無い包括的な支援のありかたに、一つの方向を示すものとして注目されます。

2つの事業が、「寄り添い繋がる地域力」「共助の力を高める」を調査研究テーマとし、地域コミュニティにおける「支え合い」のありかたについて、住民自治の現場からの考察を深めました。また、本格的な人口減少社会の局面にある現在、持続可能な社会・経済の鍵を握る社会課題として国、自治体、企業等において、女性活躍推進に関する様々な取組が展開される中、日々、行政施策等の取組やマスコミにより様々な発信される社会的情報と、メンバーに身近な女性たちの現状とのアンマッチへの疑問を端緒に、「女性チャレンジ委員会」で初めて、直接的に「女性の働き方」に関するテーマへのチャレンジがありました。

今期は、すべてのグループが、提案事業の実現への意欲をみせています。その実施主体として、自らのメンバーに加えてこれまでのチャレンジ委員会のメンバーや県男女共同参画地域推進員等人権・男女共同参画の学習者を想定しており、この動きは、「女性チャレンジ委員会」のアフターチャレンジと学習者の主体的なネットワークングを促し、薩摩川内市における男女共同参画・ジェンダー平等推進の取組のダイナミズムにつながる可能性を兆しており注目されます。

●パレットグループ

薩摩川内市「働いている・働きたい女性」の広場事業

～出会う・語る・学ぶ・・・に広がる信頼と共感のネットワーク～

このグループの調査研究は、メンバーそれぞれの「働いてきた・働いている、経験による様々な思いを発露とし、特に苦勞した、固定的な性別役割分担意識による仕事と生活の両立に関わる状況が、様々な取組によりどのように変わったのか?というきわめてシンプルな問題意識から始まりました。できるだけ多くの人の声を聴きたいと収集された、延べ600人に及ぶ一人ひとりの悩みや不安、喜びなど様々な思いや状況についての情報は、その量と、

内容のリアリティにインパクトがあり、その一人ひとりの声への共感が、すでに社会課題として「問い」も「解」も出尽くしている難題へのチャレンジを支えました。

本事業は、情報収集活動で出会った一人ひとりの状況や思いから汲み取られた、多様で複合的なニーズが包括されるインクルーシブな場や機会としての「広場」を定期的にひらくというものです。この「広場」は、「女性の働き方」に関わる諸課題の解決に向けて、自分事としての学びを深める共同学習や、職場を超えてより身近なロールモデルとの出会いによるメンタリング、情報提供による行政サービスへのアクセスなどの機能を有する“働いている・働きたい女性”のプラットフォームとして構想されています。このような当事者性の高いプラットフォームの創出は、陸奥川内市における「女性の働き方」に関わる取組の実質を効率的に高めるとともに、その拠点性に当事者間の信頼と共感によるネットワーキングを促し、当事者が主体的に動く取組のダイナミズムにつながることで期待されます。

「女性の働き方」のリアリティに心を寄せる本事業・・・、「働くことが、幸せなことであってほしい」メンバーの一人のことばが胸にひびきます。

●彩雲グループ

「ここから始まる：『虹色ベンチプロジェクト事業、』

～『寄り添い繋がる』その姿、支援の在り方を託して～

本事業は、地域の、近隣の人々による「ちょっとした」「身近な」「気軽な」支え合いを「寄り添い繋がる地域力」の基本とし、「ふれあいイベント」の実施と、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習の展開を通して、その実践への気運醸成を図るというものです。その背景には、誰ともどこにもつながらないまま潜在化し深刻化する困難な状況を包摂しきれていない、地域における支援のありかたへのジレンマと、地域における性別による固定的な役割分担等ジェンダーの現状が、「地域で、みんなで、支え合う」地域力に及ぼす影響についての問題意識があり、このジレンマと問題意識から、すべての地区コミュニティ協議会において、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習の場がひらかれるようになる・・・「ここから始まる」目標の事業像が示されました。

特筆すべきは、抽象的な「寄り添い繋がる」という支援の姿を、多様性を象徴する虹色のベンチに託し、この『虹色ベンチ』を啓発のシンボルとして活用するという発想です。イベントや共同学習等の場に置かれる『虹色ベンチ』は、「人権、男女共同参画の視点」をすべてのアクションの基盤とする本事業のマインドのシンボルであり、特に「ふれあいイベント」が、このマインドに適う内容であるよう検討されることは、地域コミュニティづくりにおける定番の課題である「地域における行事・イベントのありかた」に、新しい方向をひらくチャレンジとして注目されます。

すでに製作されて出番を待っている『虹色ベンチ』が、どこかの地域の一隅に置かれる風景を想像してみると、この事業に通底する優しい気持ちが感じられます。

●菜の花グループ×Sunny グループ

「“共助の力を高める、地域コミュニティづくりアップデート事業”

～地域、世代等を超えて誰もが尊重され、それぞれの思い、悩み、考えが言える・声を聞いてもらえる信頼関係・共感関係のある場づくり～

2つのグループの問題意識の相乗と、新型コロナウイルス感染症の影響の観点からのアプローチにより、それぞれの個別の問題意識を超えた深まりがみられ、“女性の参画の推進、と”イベントや行事の実施、は、それ自体が目的ではなく、「共助の力を高める」ための重要な手段であるということを確認しました。この確認により、地域コミュニティづくりにおける「共助による生活支援サービス提供の充実」の課題性が明瞭に提起されました。

本事業は、共助による支援を必要としている地域の人々への思いに、調査研究の過程で徐々にクリアになる「変えるべきことは、変えなければ」というミッションに根差しています。今後さらに、多様化・複雑化・複合化する地域課題の解決に向けて、公助と共助領域の協働による地域づくりへの要請が高まる中、地域コミュニティは、その重要な主体として期待されます。その一方で、コミュニティ離れや担い手の確保などの課題への対応が急がれますが、地域に根強い同調性のカルチャーや、従来の固定的な性別役割分担意識に基づく慣行により、特に、担い手として期待される女性や若い人の「変えるべきことは、変える」アクションは“孤軍奮闘”の状況に置かれることもあります。

このような現状に、地域コミュニティづくりに関する個々の問題意識や実践を「アップデート研究会」としてネットワーク化する本事業の提案は、社会的要請に応える意義があります。また、モデル地区での“受援力”が引き出されるインクルーシブな場づくり等の住民参加による実践を研究課題として、その課題や成果を一般化し発信する事業展開の手法に考慮されている現場性・親近性による波及効果が注目されます。

地域コミュニティの活動に熱心に参加し、コミュニティへの愛着と、それゆえの「変えなければ！」というメンバーの真摯な思いが伝わる提案です。

おわりに・・・

一人ひとりにより近く在るからこそ、より深く寄り添うことができる・・・We Do!は、これまでのメンバーから引き継がれてきた「女性チャレンジ委員会」のミッションです。今期は、それぞれのテーマが対象とする当事者の「誰一人取り残さない」という思いが反映されたインクルーシブな事業が提案され、このミッションの深化がみられたことを、アドバイザーとして何より嬉しく思います。この2年間の折節でのメンバーのみなさんの笑い転げる様子や、苦悩する面差しを思い起しながら、「あなたに会えてありがとう！」の気持ちでいっぱいです。「女性チャレンジ委員会」のバックヤードで活動を細やかに支えてくださった、ひとみらい政策課、センターのみなさん、情報や知見を提供してくださった関係者のみなさん、情報収集等調査研究に協力してくださった多くのみなさんに感謝申し上げます。メンバーのみなさん、さらなるご活躍を！

2023年3月

チャレンジ委員会の学習プログラム

男女共同参画の視点（一人ひとりの人権の尊重を基盤とし、サービスの担い手であると同時にサービスを創り出し提供する側にもなれるという視点から考察をする。＝地域生活者の視点、私たち一人ひとりが自治の担い手である合言葉「We Do！」）からの地域づくり事業提案までの、2年間の学習プログラムについて報告します。

1

調査・研究テーマの設定

現段階におけるグループでの問題意識を集約し、それらの問題意識の背景を話し合い、テーマを決定します。

<チャレンジ委員会の話し合いのルール>

- ①批判厳禁 ②自由奔放
- ③量を出す ④結合改善



2

情報収集

地域の現状を把握するために、委員は情報収集を行います。（情報を付箋紙に書き出します。）地域の方から5人は聞き取りを行い、付箋紙20枚を目標にします。



3

意見情報から事実情報への修正

情報収集した情報のほとんどが意見情報になっているため、事実情報へ変換する学習を行います。

（例）（意見情報）子育て世代の人は、自分の生活のことばかりで、地域の行事に参加しない。→

（事実情報）私の住んでいる地域では、子育て世代の人の多くが、地域の行事に参加していない。

これは、個々の情報に特定の価値意識がはたらいっていないか？事実として受け止めているか？ということを明確にし、確かな問いを導き出します。

今までの固定観念を振り払いながらの作業になります。

4

カードのグループ化・現状把握

事実情報に修正したカードを「共通性がある」「関係性がある」のレベルでグループ分けをします。言葉そのものではなく言葉の背景にある問題意識をイメージでまとめます。まとめたカードに見出しをつけます。まとめられるかどうかわからないカードも積極的に検討していきます。



5

空間配置・図解の作成

グループ分けしたカードを相互関係を考えながら模造紙の上に配置し情報の分析を行います。関係線を引き図解を完成させます。

【相互関係】

- ・因果関係アリ
- ・密接な関係アリ
- ・関係アリ
- ・相互に影響しあう関係アリ
- ・反対または対立し合う関係アリ



現状把握したことを、図解作成することで、テーマについての問題がいくつか抽出できます。その問題について「なぜ、そのような問題があるのか？」問題の本質をつかみ、それらの問題解決のためには「このようなことをしなければならない」「こういう事をやろう」という課題を選び出していきます。

抽出された課題に対して「何を私たちは、しなければならないのか」を明確におさえていきます。

解決策を設定し、今までの作業を振り返りながら、実現可能な事業を決定します。

調査・研究テーマ

・どのような思いを持ってテーマの設定を行ったか。

現状把握

・情報収集を行い、グループ化し、図解によって問題意識を導き出す。

重点課題の抽出

・現状把握の基盤となった、問題意識を集約する。

地域づくり事業提案（事業名の決定）

・課題解決のための事業が決定します。

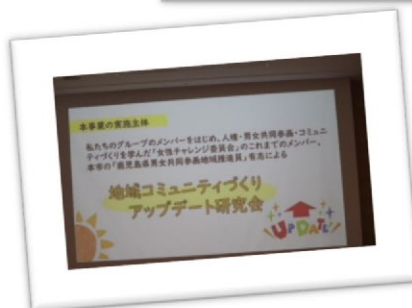
課題解決のための事業提案＝「地域づくり事業」が決定し、私たちが導き出した地域課題解決に向けて、どのような取り組み

を行っていけば良いかを事業提案として、まとめていきます。



男女共同参画の視点に立った地域づくり事業提案を完成させ、チャレンジ委員会での発表会を行います。

発表会の様子



市長へ「男女共同参画の視点に立った地域づくり事業提案」の報告をし、事業の実現に向けて、取り組んでいくことになります。

「We Do!」私たちがやっていきましょう！（我がたっですっど!）をコンセプトに、各地域に委員の方が学びを還元し、地域の方々を巻き込みながら、一人ひとりにより近くにいる住民として、一人ひとりに寄り添っていける人が誕生していきます。

私たちが提案する地域づくり事業

～We Do！実現可能な事業提案～

第9期薩摩川内市女性チャレンジ委員会 地域づくり事業の提案
グループ名（ パレット ） 委員（ 柏木、平野、内野、川路、中俣、川畑 ）

私たちが提案する地域づくり事業

薩摩川内市「働いている・働きたい女性」の広場事業

～出会う・語る・学ぶ・・・に広がる共感と信頼のネットワーキング～

●地域づくり事業の提案に至った調査研究の経緯

○調査研究テーマの設定→○現状把握のための情報収集(参考資料P 1 5 参照) →○情報の点検(意見情報から事実情報への修正)→○情報の分類→情報の分析(参考資料：“現状把握～課題抽出の図解、P 1 4)→課題の抽出→課題解決のための地域づくり事業の立案

●私たちのグループの調査研究のテーマ

「薩摩川内市における女性の働き方について」

私たちのグループは、「働いてきた・働いている」メンバーそれぞれの経験を共有する中で、「仕事をしながらの子育ては大変だよね」「本当だよね、時間に追われる毎日だったよね」「これから先、親の介護しながら働くのは大変だよね！」など仕事と子育てや介護の両立の大変さへの共感をベースに、調査研究のテーマについて話し合った。

話し合いを進めるうちに、本市においても、「女性活躍」の取組が進められている今、女性の働き方をめぐる状況は、どのように変わったのか？子育て世代の人達の働き方は、私たちが経験してきた状況と比べてどうなのか？もし、今も、私たちの子育て期のように、家庭にも職場にも根強くあった固定的な性別役割分担意識による大変な状況が変わっていないのであれば、「女性活躍」は進まないということを、メンバー全員の経験からの実感として確認するなど「女性活躍」と「女性の働き方」の関係についての問題意識が深まり、私達は、「薩摩川内市における女性の働き方について」調査研究をすることにした。

●本事業の趣旨

人口減少、少子高齢化の進展という社会経済情勢の変化の中で、今後さらに労働力の減少への対応が求められるようになり、最大の潜在力とされる女性の働き方をめぐる課題解決は、本市においても、個人の幸福追求と持続可能な活力の醸成という観点から重要な課題である。

このような社会課題を踏まえ、私たちは、メンバーの働いてきた・働いている経験からの実感を手掛かりに、本市における女性の働き方をめぐる実態を探るために、アンケート調査の実施等による情報収集を行い、多くの女性たちの声を聴いた。

これらの声の背景にあることは、調査研究の過程で様々なデータ等で確認し、すでに一般に周知されている全国的・社会的な傾向と同様ではあったが、改めて、本市で働く、延べ600人の女性の声からの実態としてリアリティをもって捉える事ができたことは、私達のグループの調査研究活動の成果として有意義であったと思う。

また、本市においても、「男女共同参画社会基本法」（薩摩川内市男女共同参画基本条例）「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」に基づき「女性の働き方」に関する様々な取組を進めているが、私たちの調査研究活動の過程において、それらの取組が十分に浸透しているとはいえない状況であることも実感した。この状況改善の必要性を視野に入れて、私たちは、収集した情報を基に「薩摩川内市における女性の働き方」について、以下の課題を抽出した。

●調査研究から抽出された課題

課題①～仕事と子育ての両立に関わる困難な状況の改善に向けた、必要な情報やサービスが、必要な人に届く仕組みづくり

課題②～固定的な性別役割分担意識や女性自身にもある性別による無意識の思い込みに“気づく”、男女共同参画・ジェンダー平等、スキルアップ・キャリアアップに関する知識等について働いている・働きたい女性が身近に学び合い、情報交換できる場づくり

課題③～働いている・働きたい女性が、それぞれの職場や生活の状況により抱えている悩みや困難を、職場を超えて身近に相談できる人と出会い・つながる場と仕組みづくり

これらの課題解決に向けて、私たちは、「働いている・働きたい女性」が、“働き方”に関わる悩みや困難、働きがいや働く喜びを語り合う中で癒され・励まされ、いろんなことを学ぶ中で高め合う・・・共感と信頼でつながる“場”をつくり、この場に集積される「働いている・働きたい女性」のリアルな声が、本市における「女性の働き方」に関する取組の一助となるよう、課

題①・②・③に対応できるプラットフォームとして機能を有する薩摩川内市「働いている・働きたい女性の広場事業」を提案する。

●本事業の内容

○実施主体

私たちのグループのメンバーをはじめ、人権・男女共同参画・コミュニティづくりを学んだ「チャレンジ委員会」のこれまでのメンバー、本市の「鹿児島県男女共同参画地域推進員」有志等による「女性の広場サポーターズ」

○どのような“場”なのか～事業像

集う・出会う・語る・学ぶ・・・→つながる（ネットワーキング）
・・・→女性のエンパワーメント

“働いている・働きたい女性”が、“働き方”に関わる悩みや困難、働きがい語り合
う中で 癒され・励まされ、いろんなことを学ぶ中で高め合う・・・共感と信頼で
つながる “場”



マインドアップ × スキルアップ・キャリアアップ・・・→女性のエンパワーメント

●事業の具体的な内容

「働いている・働きたい女性」のプラットフォームとしての “広場” に必要な “機能”

○交流

- ・参加者間の交流
- ・経営者層との交流による意見・情報交換
- ・次世代を担う中高生女子との交流～今後、女性の働き方をめぐる社会経済環境の変化が予測される中、本市においても次世代を担う中高生女子のキャリア教育は重要課題であり、本市の働く女性の先輩からのエールを送り経験を伝える交流の機会をつくる。
- ・パートナー(夫や恋人等)と共に参加する交流・・・等

○メンタリング(職場を超えたロールモデルと出会う)

- ・メンタリング～働いている・働いてきた先輩(メンター)とつながり、悩みや困難を抱える(メンティー)との対話による助言・励ましを行う。

○情報提供

- ・参加者間での当事者性のある情報交換
- ・仕事と子育て・介護との両立支援等ワーク・ライフ・バランス、再就職、保活等に関する行政サービスについて、市からの情報提供 等

○学習機会の提供

- ・男性と共に学ぶ機会の提供
- ・参加者のニーズを汲み取り、企画・実施
(想定される学習内容～男女共同参画・ジェンダー平等、“女性の働き方”に関する法律・制度、健康、経済の基礎知識、マネー・税、アサーティブ・コミュニケーション・・・等)

○情報発信

- ・活動内容・学習内容等を発信するコミュニティ・ペーパーの定期的発行
- ・ホームページの開設

○相談

- ・悩みや困難の具体的解決を求める人、その必要があると思われる人は、市関係課・専門機関等に適切につなぐ。

○提言(アドボカシー)

- ・“女性の働き方”に関わる市の施策・事業に反映されるよう、参加者の声を集約し、意見交換～提言を行う。)

●事業計画

【短期：数か月～1年】

- ① 実施主体となる「女性の広場サポーターズ」の立ち上げ
パレットグループと今期の女性チャレンジ委員会から参加メンバーを募集
これまでのチャレンジ委員会経験者・県男女共同参画地域推進員への参加依頼
- ② 市の男女共同参画・ひとみらい政策グループとの協働についての協議
- ③ 「女性の広場サポーターズ」発足の会の実施
本事業の趣旨説明・各メンバーとの情報交換と交流
- ④ 連携・協働が想定される薩摩川内市の関係課への本事業の説明
- ⑤ 第1回「女性の広場」の開催準備
 - ・「多様性を理解するためのワークショップ」セミナー 高崎恵氏（市出前講座を依頼予定）
 - ・広報に関する検討会

- ～FM川内等による情報発信、ちらし・ポスター制作等広報の方法について
- ⑥アンケートに協力頂いた、企業・個人への本事業の説明案内と第1回「女性の広場」開催の案内

●連携・協働が想定される市関係課・団体・個人等

- ・薩摩川内市男女共同参画・地域コミュニティ・ひとみらい政策グループ
- ・薩摩川内市関係各課(行政サービス・情報の提供、参加者の中で出された悩みや困難に対する相談対応)
- ・市男女共同参画センター
- ・かごしま女性政策研究会
- ・「つんつんカフェ」のメンバー(男女共同参画の視点に立って、日常の悩みや困りごとが吐かれる雰囲気づくりを醸し出せる人材)

参考資料

●調査研究の内容

- 聞き取りによる情報収集～メンバー各自が、地域に住む人、友人、知人に「女性の働き方」についての聞き取りによる情報を収集した。
- アンケート調査の実施による情報収集～メンバー全員で手分けして、薩摩川内市で働いている人を対象に、「女性の働き方」に関する10項目について実施したアンケート調査による情報を収集した。(10代～70代 326名)
- 市子育て支援課へのヒアリング
 - ・保育園の待機児童の状況について
 - 「ファミリーサポートセンター」、その他の子育て支援事業について。
- 多様なニーズに対応できる保育園3箇所へのヒアリング。
(のびのびっこ保育園・ちゅうりっぷ園・水引保育園)
- 「ファミリーサポートセンター」運営担当者へヒアリング
- 市障害・社会福祉課へ生活困窮の状況等についてのヒアリング
- 国・県・市における「男女共同参画」「女性活躍」に関する各種調査等による学習・研究

課題抽出に向けた、現状把握のための図解

(調査研究テーマの現状として把握された(A)～(E)は、P6の個別の情報を集約したものです。)

(C) 薩摩川内市の子育て支援においては、支援される側の要望を把握し、保育所利用等子育て支援のニーズの多様化への対応が図られるよう取り組んでいるが、それらの取組に関するサービスの内容などの情報を入手できていない・子育てと仕事の両立に関する困難や悩みを身近に相談できる人がいない当事者がいることが、中々希望に添うことができない状況の要因の一つになっている。

(A) 薩摩川内市においては、時間外保育・休日保育・病児保育・事業所内保育等、多様な保育ニーズに対応できる保育施設があるが、子育てや働き方に関わる個別の事情による緊急的な一時預かりのニーズへの対応に関する情報の入手ができていないなどの理由により困難な状況におかれている人がいる。

(B) 薩摩川内市待機児童の推移調査によると、待機児童は令和元年度が2名、令和2年度は0名であるが、実際には、子どもの保育所入所を希望したが育休中で入れなかった、認可保育所を希望したけれど入所できず、やむを得ず認可外保育所に入所したなど待機児童数にカウントされていない「見えない待機児童」(潜在的待機児童)の状況があり、求職活動を止めたり、出産後や育児休業後の職場復帰など就業・就業継続の希望がかなわず困難な状況におかれている人がいる。

(D) 「薩摩川内市／男女共同参画(従業員)アンケート調査報告」(令和元年11月)によると、「女性が活躍する上での阻害要因」について、「男性と比べ、女性は家庭の負担が重い」と回答した人の割合が最も高くなっている。(62.9%)また、約5割の女性が「管理職に就きたくない」としている。
私たちが実施したアンケート調査においても、子育てをしながら仕事をしていくことの困難が、女性の就業意識・意欲に影響を及ぼしている傾向があり、その背景に、依然として、女性自身にも「母親だから」「女性だから」という性別による無意識の思い込み(アンコンシャスバイアス)があり、家庭での役割の負担を自らが重くしている状況がみられる。

(E) 私たちが実施したアンケート調査において、職場における男女平等の状況について、53%の女性が「平等である」としているが、実際には、制度面では平等になっているが、職場における固定的な性別役割分担意識に基づく職場の風土・慣行による男女格差・不平等が、女性の就業意欲に影響を及ぼし、働きづらい状況に置かれている人がいる。

課題の抽出

●収集した主な情報

(C)

- ・薩摩川内市には、認定こども園に1ヶ所、地域型保育事業に2ヶ所の休日保育施設があり、仕事や学校行事等のコロナ禍による人数制限で利用されているが、保育士の確保が難しく、限られた人数しか預かりが出来ないため、緊急時の対応ができずにいる。
- ・薩摩川内市の子育て支援課では、母子手帳交付時に、「子育て応援帳」（支援サービス情報誌）を一緒に渡しているが、私の知る30代子育て真っ最中の女性は、目を通すどころか、その情報誌が手元にある事さえ気づいていなかった。

(A)

- ・薩摩川内市には祝祭日に子供を預かっている施設があるが、その情報を得られずに、土日祝日に預ける先がなく、仕事をやすまなくてはならなくなっている人がいる。
- ・保育施設を利用して働いている私の知人は、保育施設が遠く送迎に時間がかかる事が負担になっている。
- ・私達が聞いた情報の中に、働きやすさのニーズとして、会社、若しくは自宅の近くに託児所や保育施設に子供を預けたいと言う声が多くあった。

(B)

- ・30代の女性で、小学6年生・3年生・1歳の3人の子供を持つパート勤務者、12月に仕事復帰する予定であったが、希望する保育園に空きがなく仕事復帰の時期を延長してもらっている。
- ・私達と一緒に活動する委員会の方の30代の娘さんは、第一子出産で休職1年後に復帰を予定していたが、0歳児の保育預かりが厳しい状況で、5か所の保育園をあたったが、入所できず、休職の延長をし、職場復帰が2年後になった。

(D)

- ・40代の女性、小学生2人の子育て中、夕方になると子供の習い事や少年団の送迎、家事に追われる現状に、責任の重い管理職やスキルアップ等、望めないと諦めている。
- ・私達が実施したアンケート調査において「仕事をしている理由」について、“” 生活的理由” である「家族の生活を支えるため」（22%）の他、「子供の教育費に充てるため」「将来に備えて貯蓄するため」「老後が不安なため」など” 生活的状況”（38%）からの理由を挙げる割合に比べて、「自分の技能や知識等を活かしたいため」「会社との関わりを持ちたいため」など” 自己実現 “に関わる理由を挙げる割合は24%と低かった。
- ・「薩摩川内市/男女共同参画(従業員)アンケート調査」において、約5割の女性が(令和元年11月)管理職に就きたくない」としており、その理由として「長時間労働となり、仕事と家庭生活の両立が困難になるから」（53.7%）、「責任が重くなるのが嫌だから」（59.3%）を挙げている。

(E)

- ・私の地区の40代後半で働く女性は、男性と同様に仕事を頑張っているが、女性というだけで、キャリアを持っていても役職等に反映させてもらえないでいる。
- ・私達が実施したアンケート調査において、職場における男女平等の状況について、33%の女性が「平等である」としているが、20歳代～60歳代以上のどの年代においても、約4割の女性が、給与・昇進において男性が優遇されているとしている。
- ・「薩摩川内男女共同参画企業アンケート報告」によると、令和元年6月1日現在の雇用形態の男女別状況は、男性の正規雇用93.4%、非正規用6.6%に対して、女性は正規雇用36.0%、非正規雇用64.0%と、大きな男女格差がある。
- ・40代以上の女性は、主任止まりで、それ以上の昇進の例はなく、女性を管理職へ育成する環境が会社がないとする人がいる。

女性チャレンジ委員会の活動を振り返って

パレットグループ

平野 志穂美

薩摩川内市の女性チャレンジ委員の委嘱を受け、場違いではないかという不安と、目的も理解できていない中で、チャレンジ委員メンバーとしてこの2年間、活動させて頂きました。

面識もない方々とのグループ活動で、どの観点からお話ししてよいのか、どのようなテーマ選定をすればよいのか、只々、その時々作業をこなすだけで、自分の立ち位置が分からず、どこに向かって行動したらよいのか、参加する度に、頭をひねり、沈黙と悩む事が多々ありました。

しかし、経験者にリードして頂き、また、これまでの活動等を参考にしながら、多岐にわたりご指導くださった事で、ここまで、何とか皆さんの後を追いつながら、任期を終えることが出来ました。また、いつの間にか自然と作り上げたチームワークの力だったのではと思います。

そして、たもつ先生には、展開していく方向性を誤ると、きちんと起動修正をしていただき、滞る事なく、ご指導頂いた事にも、大変感謝し、お礼申し上げます。

この経験が、これからの私の社会に対する向き合い方や、視野を広げる糧になったと感じております。

最後になりましたが、これまでの活動は、チャレンジ委員の皆さんの経験と知恵と時間と労力の元に成しえたものです。この、皆さんの精一杯のチャレンジ委員会への熱意と活動が無駄になることのないよう、また、机上だけで終わらせないよう、薩摩川内市のこれからの市政に価値あるものにして生かして頂けたらと考えます。

1人のつぶやきから、共感し寄り添う事で人と人の大きな輪を作り、持続可能な社会を育て、住んで良かった、働いて良かったと市民の多くの声が聞こえる薩摩川内市に!!

第9期薩摩川内市女性チャレンジ委員会 地域づくり事業の提案
グループ名(彩 雲) 委員(奥園、柳、田畑、堀内、岩出、家村)

私たちが提案する地域づくり事業

「ここから始まる♥“虹色ベンチプロジェクト”事業」

～“寄り添い繋がる”その姿、支援の在り方を託して～

●地域づくり事業の提案に至った調査研究の経緯

○調査研究のテーマの設定→○現状把握の為の情報収集(参考資料P23～P25参照)→
○情報の点検(意見情報から事実情報への修正)→○情報の分類→情報の分析(参考資料P
27・P28参照)“現状把握～課題抽出の図解”P26参照)→○課題の抽出→課題解決
のための地域づくり事業の立案

●私たちのグループの調査研究テーマ

「子育て世代や様々な家庭に寄り添い繋がる地域力」

私たちのメンバーは、年齢層も幅広く、それぞれの地域で、いろいろな経験が豊富な為に、なかなか調査研究テーマはまとまらず、話し合いは難航しました。

その中で出てきた問題も多種多様で、これらの問題のどれも、地域の住民の一人ひとりであるメンバーが、日頃から地域活動を通して様々な支援に関わる中で、どう向き合えばいいのか、どう関わればいいのかと、心を寄せ続けてきたことでした。

中でも、様々な地域の活動や行事の場に姿がみえない子育て世代の人や、その子どもたちが、置かれているかもしれない・・・様々な困難な状況に、すべてのメンバーが、ひときわ思いを寄せていました。しかし、個人的なことや家庭のことに関わることのハードルは高く、よく言われる「寄り添い繋がる」ということの難しさについても語り合いました。

このようなジレンマを共有する中で、私たちは、誰ともしつながらない中での困難課題が、潜在化し深刻化することに、地域の人々による「寄り添い繋がる」地域力が必要とされ期待されていることを踏まえ、真に「寄り添い繋がる」ということは、どういうことなのか、その姿～あり方について考えたいということで、調査研究テーマを「子育て世代や様々な家庭に寄り添い繋がる地域力」としました。

●本事業の趣旨

～子どもまん中社会の実現に向けて～子ども家庭庁ができ、これまで私たちが、地域の子育て世代の人たちや、その子ども達と関わる中で、その必要性を実感してきた「子どもや家庭が抱える様々な複合する課題に対し、制度や組織等による縦割りの壁を超えた切れ目のない包括的な支援」の方向が見えてきました。また、すぐそこまでやって来ている2025年問題に、少子化に伴う人口減少や超高齢化社会に伴う医療費・介護費の増大などで、影響を受ける現役世代～子育て世代の負担増等による影響が心配されます。さらに、私たちは、2021年以降、突然のコロナ禍で、隣近所や地域との繋がりが希薄化し、孤立状態がより深刻化している傾向に、自治会に加入していない子育て世代の人や、女性の雇用や所得への影響により経済的に困窮しているひとり親世帯の母など、身近な人たちの困難な状況に心を寄せてきました。

このような社会の動きによる地域の人々への影響を踏まえ、私たちは、情報収集等調査研究を行いました。子育て世代の悩みや不安・困りごと、抱えている困難は、経済的なものから精神的なものまで幅広く多様化していること。行政や社会福祉協議会等の事業・支援に関わるサービスや情報が、必要とする人に届いていない状況で、悩みや不安を一人で抱え込んでいる人がいることを実感しました。このことは、毎回「女性チャレンジ委員会」にて出てくる課題でもあります。

一方、地域の中で、このような状況を“人をおもう気持ち”から、ほっとけない近所のおばちゃん・おじちゃんによる活動などに様々な、取り組みも出てきており、地域の人たちの“おmoi”による、寄り添いや、ちょっとした手助けで救われる人がいました。

人々の抱える困難は、多様化、複合化しており、私たちは、今後さらに求められる「寄り添い繋がる地域力」には“人をおもう気持ち”から繋がる“信頼関係”こそ、欠かせないものであることを確認しました。

また、地域に依然として根強い、性別による固定的な役割分担や偏見等ジェンダーによる様々な問題があることを再認識しました。ジェンダーの影響は、子育て世代の悩みや不安、自治会・地区コミュニティ協議会の活動・支援の在り方にも反映されており、私たちは、改めて、「寄り添い繋がる地域力」には、ジェンダー・男女共同参画の視点が重要であることを共有しました。

これらのことから以下の課題を抽出しました。

●調査研究から抽出された課題

- ① 子育て世代の人は、地域との関わりが希薄になる傾向にあり、日常の中での悩みや不安を気軽に相談できる身近な場所や人の存在や、日常の生活の様々な場面での、負担にならない“ちょっとした”寄り添いによる支援を、必要としている。
- ② 地域の中に潜在している“見ようとしなければ見えない”家庭や子どもが抱える困難や悩みに寄り添い繋がる地域力を醸成するためには、地域における人権尊重と男女平等を基盤とする男女共同参画意識の醸成が必要である。

私たちは、「寄り添い繋がる地域力」の向上を目指し、①②の課題の解決に向けた「ここから始まる♥“虹色ベンチプロジェクト”事業」を提案します。

●本事業の内容

○事業の実施主体

女性チャレンジ委員会“彩雲グループ”のメンバーと、各地区コミ協から推薦され「女性チャレンジ委員会」で人権・男女共同参画を学び終了された人を主体とする。

女性チャレンジ委員会のメンバーは、各地区コミ協より推薦を受け、2年間「人権や、男女共同参画社会の基本理念」を学び地域づくりを考えてきました。その女性チャレンジ委員会を終了した人材をメンバーとする2つのチームにより、以下の3つのプロジェクトに取り組みます。

○取り組み①～「寄り添い繋がる」きっかけをつくる”虹色ベンチ”プロジェクト

日常生活の様々な場面での、負担にならない“ちょっとした”寄り添いによる支援の在り方～その姿のシンボルとして、大人も子どもも誰でも座れる、ダイバーシティ(多様性)を象徴する”虹色“の“ベンチ”を作り、私たちが心を寄せてきた、地域とつながる。

地域の人と関わることなく、悩み、不安、困りごとを一人で抱え込んでいるかもしれない・・・子育て世代の人、その子どもたちが「寄り添い繋がる」誰かと出会うきっかけになればいいという思いを託して、取り組み②の「ふれあいイベント」、取り組み③の「地域で、みんな、男女共同参画を学ぶ」共同学習の場に置きます。

「ただ座っているだけでいい。隣に誰か座れば。会釈をするだけでいい。」虹色ベンチ、ここから始まる出会い、関わり、繋がりをゆっくり、ゆったり紡いでいきます。

希望のある場所へ、私たちが運ぶ“虹色ベンチ”は、日常の生活の中での“ちょっとした寄り添い”による支援が大切なことを発信し、地域の人々による「寄り添い繋がる地域力」を

高める取り組みのシンボルとして定着を目指します。

まず、私たちから始まる“虹色”プロジェクトです。本事業主体である私たちが、虹色ベンチで出会う誰かと、関わり～つながり、次第に生まれる信頼関係から悩みや不安、困りごとを気軽に相談できる身近な人でありたいという思いを託しました。

○取り組み②～「(仮)虹色ベンチ de ふれあいイベントプロジェクト」

虹色ベンチを囲み、あらゆる世代の人が、顔見知りになり自然につながる場としてのイベントを実施します。その内容の企画立案にあたっては、“虹色ベンチ”マインドを踏まえ、地域の人との関わりが“ここから始まる”人に配慮し、“ふれあいイベント”を通して次第に生まれる信頼関係が日常生活の中での“ちょっとした寄り添い”につながる“きっかけ作り”となるよう研究します。また、“ふれあいイベント”の参加者から悩みや、困りごとがつぶやかれる・相談される場合がある時は、本人の了承の上で、市関係課・関係機関につなぐとともに、行政等のサービスの情報提供を行います。子育てを終えた人たちに“ここ虹プロジェクト”のチームの中心スタッフとして参加してもらいます。

○取り組み③～「(仮)“男女共同参画ここからプロジェクト”」

本事業の取り組みにあたっては、“虹色ベンチ”やふれあいイベントで出会う人、又せっかく心を開いてくれた参加者が、他の参加者や、スタッフの人からの、心無い一言で傷つく「活動や支援の二次被害」がないよう人権尊重や男女平等を基盤とする「男女共同参画の視点」の十分な理解の共有が必要であり、また、本事業が目指す「寄り添い繋がる地域力」においても、地域全体で男女共同参画についての理解の浸透を図ることが求められます。そのため、地区コミュニティ協議会単位で、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習の場を開きます。その取り組みをきっかけに本市の「男女共同参画宣言都市・薩摩川内」20年目の節目(令和7年4月)に向けて、各地区コミ協において、年間計画の必須事業となるよう気運を高め、働きかけを行います。また、“虹色”は、多様性(ダイバーシティ)を象徴する色であり、男女共同参画(ジェンダー平等)は、多様性(ダイバーシティ)の中核を成す課題であることから、私たちが、ひらく共同学習のシンボルとして、その場にも“虹色ベンチ”を置きます。

※以下の「男女共同参画の視点」「男女共同参画意識」とは、人権尊重と男女平等を基盤とするものです。

●事業計画

ここから始まる ♡ “虹色ベンチプロジェクト”は、「ここからチーム“と“ふれあいイベントチーム”の2つのチームで事業を進めます。

まずシンボルとなる“虹色ベンチ”を作ります。

事業1～《タスク》ここからチーム

令和5年4月～令和10年3月を目標に進めます。

- ① 各地区コミ協より推薦を受け、女性チャレンジ委員会終了した人材を「ここからチーム」メンバーとして、「“ここ虹プロジェクト“」の趣旨、取り組みにおいて重要な「男女共同参画の視点」を共有する。
- ② 令和7年4月「男女共同参画宣言都市 薩摩川内20周年記念」を節目とした、各地区コミ協へ、「“ここ虹プロジェクト“」の趣旨を丁寧に説明し、「男女共同参画意識」の浸透に向けての、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習の場への参加協力を要請する。
- ③ 各地区コミ協出身の「ここからチーム」メンバーなどが中心となり、地区コミ協の中で、少人数のグループに分かれて、シンボル“虹色ベンチ”に寄り添いながら、随時、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習を行い、「男女共同参画の視点」の十分な理解を深めてもらう。
- ④ 各地区コミ協には、年間計画の中に、シンボル“虹色ベンチ”に寄り添いながら「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習を積極的に取り入れてもらい「男女共同参画視点」の理解の浸透を図る。
- ⑤ シンボルの“虹色ベンチ”に寄り添いながら、「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習での学びを通して、「“ここ虹プロジェクト“」の趣旨をわかりやすく理解してもらい認識の共有へと丁寧に繋げていく。
- ⑥ 各地区コミ協などで「男女共同参画の視点」を踏まえシンボル“虹色ベンチ”に寄り添いながら「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習で学び、「“ここ虹プロジェクト“」の趣旨を理解し、賛同いただいた方などが、また新たな「ここからチーム」メンバーとして「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」共同学習の場を、引継ぎ、また「ここから始まる。」～「地域で、みんなで、男女共同参画を学ぶ」「ここから始まる」ネットワーキングへと繋げていく。

事業2～《タスク》ふれあいイベントチーム

令和5年4月～令和10年3月

- ① 各地区コミ協より推薦を受け、女性チャレンジ委員会終了した人材を“ふれあいイベントチーム”のメンバーとして“ここ虹プロジェクト”の趣旨、取り組みにおいて重要な「男女共同参画の視点」を共有する。
- ② “ここ虹プロジェクト”の趣旨に沿った“虹色ベンチ de ふれあいイベント”の内容について検討し、第一回“ふれあいイベント”の企画立案を行い、実施に向けた計画を立てる。

・“虹色ベンチ”を置き、「寄り添い繋がる」きっかけ作りのための“ふれあいイベント”を定期的に行う。

・ふれあいイベント”参加者への自然なアプローチ方法や、寄り添い方など“ふれあいイベントチーム”メンバー間で、“虹色ベンチ”マインド※を踏まえた上で検討する。

※「“虹色ベンチ”マインド」とは、

・「シンボル“虹色ベンチ”を置き、“虹色ベンチ”に座る人にただ静かに、優しく寄り添う」。

・「シンボル“虹色ベンチ”を置き、ゆるやかに関わる」

・「コミュニケーションは、自然の流れにまかせる。」

③ 活動や支援する側からの二次被害がないように、“ふれあいイベントチーム”メンバーの事前学習会を十分に行い「男女共同参画の視点」の理解を共有する。

④ 地区コミ協などへ、趣旨説明を丁寧に行い“虹色ベンチ de ふれあいイベント”の開催場所について協力をお願いする。

⑤ イベントの情報を、市報やコミ協だよりなどで広報する。また各地域の民生委員・児童委員に担当地区の子育て世代の方などに声掛けの協力をもらう。幼稚園・保育園・子ども園、子育てサロンなどにも広報の協力依頼する。

⑥ “ふれあいイベント”の参加者から悩みや、困りごとがつぶやかれる・相談される場合がある時は、本人の了承の上で、市関係機関に繋ぐとともに、行政等のサービスの情報提供を行う。

・行政機関などの支援やサービスの情報などについて学習を深め、参加者へ随時提供できるように関係機関と連携を図る。

⑦ “ふれあいイベント”の実施後・参加者の協力を得て行うアンケート調査紙を作成する。

⑧ アンケートの結果を参考に“ふれあいイベント”の検討会、反省点や問題点などの意見交換を行い情報を共有する検討会を実施する。

⑨ “ふれあいイベント”を実施した他の地域ともコミュニケーションを図り、実施地区を増やす活動を行う。

・この活動において“虹色ベンチ”に寄り添う“ふれあいイベント”は、“ここ虹プロジェクト”“チームに参加し中心となり活動する、子育てを終えた人達等のメンバーとともに、自治会への加入・未加入を問わず、子育て世代や、その子どもたちなど、世代を超えた人とふれあう中で、地域の人々による「寄り添い繋がる地域力」を高めることをめざして実施していることを伝える。

・令和10年3月チームの、事業を完了することで「ここから始まる！虹色ベンチプロジェクト」は、終了する。

しかし“ここから始まる♥虹色ベンチプロジェクト”から広がった、“虹色ベンチ”マインドを持った人たち一人ひとりが、“地域の力”となり、“思いやり”から寄り添いや繋がりが

が、ここからがまた始まり、広がっていくのではないかと思います。広がっていくのではないかと思います。

●連携・協働が想定される市関係課・団体・個人等

◎市…子育て支援課・市民健康課・子ども包括支援センター・コミュニティ課
・団体…社会福祉協議会・地区コミュニティ協議会・自治会連合会・高齢者クラブ・いきいきサロン・他関係部署・各種ボランティア団体
・個人…男女共同参画推進委員・女性チャレンジ委員並びに女性チャレンジ委員会修了者
・インターネット SNS などのネットワーク等の知識を有する人・建築・DIY 経験者・医療従事経験者・外国国籍の方・学校、幼稚園、保育園の教諭、保育士退職者・手話通訳・英会話・様々な趣味を持つ愛好家・民生委員児童委員及び退職者・健やか支援アドバイザー及経験者・自治会長

◎“虹色ベンチ de ふれあいイベント”の開催場所を希望する場所
メンバーの地域・中央公民館・まごころ文学館・各地公園・48地区コミ協・各地区の自治会館や公民館・泰平寺・藤川天満宮・丸山公園・甌島など

◎チラシ配布依頼を希望する所
市子育て支援課・子ども包括支援センター・コミュニティ課・市民健康課・社会福祉協議会・48地区コミ協・自治会連合会・幼稚園、保育園、子ども園・高齢者クラブ・いきいきサロン

資料①

○調査研究の内容

●現状把握のための情報収集

(1) メンバーの身近にいる子育て世代から聞き取り調査 参考資料②※1・2参照

◎1「子育て中の困り事や悩み事」◎2「子育て中に、他の人に助けられたこと、掛けてもらって嬉しかった言葉など」

(2) 市における子育てに関する行政サービスや、取り組みなどの情報収集

・市「子ども子育てに関する支援のご案内」、社会福祉協議会子育て支援情報より

(3) ファミリーサポートの昨年度の利用状況より

(4) 女性の生理休暇取得状況についてひとみらい政策グループに依頼。

薩摩川内市職員の女性242名のうち、労働基準法第68条に認められている生理休暇の取得は、昨年度4件。延べ人数で8名に留まっている。

(5)メンバーの周辺の地域や、地域の人が自主的に行っている活動の調査。

- ・メンバーの地域には、新しく出来た横断歩道に、子ども達の安全のためにと、横断旗を手作りしてあげている人がいる。
- ・メンバーの地域では、子ども育成会の総会などで、「110番の家の人」「通学路での見守りの人」などを保護者や、子どもに紹介して顔見しりになってもらっている。
- ・小学校との繋がりの一つとして、朝の読み聞かせのボランティアをしている人がいる。
- ・地区コミで子どもの見守りをしようと、地区内の自治会長が当番で、朝の交通安全の見守りと挨拶運動に立っている。

(6)自治会加入の推移 ※令和4年地区コミュニティに関する研究会報告書より

(600市区町村における自治会等の加入率の平均)平成22年78.0%→令和2年71.7%

◎低下の理由・加入する意味が分からない・役員の業務や寄付などの負担が大きい

- ・役員の固定化等による風通しの悪さ

(7)平成28年国勢調査による平均所得金額の男女差表より

- ・平成22年(児童のいる家庭所得を100として)母子世帯所得44.2%

父子家庭所得69.1%

- ・平成27年(児童のいる家庭所得を100として)母子世帯所得49.1%

父子家庭所得81.0%

(8)メンバーの身近にいる子育て世代から聞き取り調査(自治会で起こった事)

・私の地区の男性は、持病をもっていて体力がないため、自治会の行事の草払いの仕事や、川掃除の仕事の際、簡単な仕事をしていると「男のくせに、だらしないね」と言われ、それ以降自治会の行事に出てこなくなった。

・私の自治会では、自治会役員が決まらず、見かねた女性が手を挙げたが、「女には難しいから」「かわいそうだから」と、結局男性の中から役員が決まった。等

資料②

(1)メンバーの身近にいる子育て世代から聞き取り調査

◎1※「子育て中の困り事や悩み事」

- ・子育てに出費がかさむ。・自分の時間が持てない
- ・子どものしかり方が分からない
- ・気持ちに余裕がない・仕事や家事が十分できない
- ・子どもの食事について、栄養がちゃんと取れているか心配
- ・兄弟の育て方・トイレのトレーニングのやり方が分からない
- ・ワンオペ状態だ・保育園や幼稚園に入れない
- ・子どものイヤイヤ期で、こちらがイライラする。

◎ 2 ※子育て中にかけられて嬉しかった言葉など

・初めての子どもで、自分の子育てが正解なのか分からず、毎日イライラしては、反省する繰り返しの中、買い物に出かけたときベビーカーの息子を見かけた年配の女性の方が、「今どのくらい？」と聞かれたので「6 か月です」と答えたら「こんなに大きく育ててもらって良かったねえ。素敵なママに感謝しなさいよ」と息子に向かって言ってくれた。すごく嬉しかった。

・スーパーに買い物に行ったとき、子どもがグズりはじめ、次第に大きな声で泣き始めました。周りに迷惑になるかもと、ビクビクしていたら、高齢のご夫婦が「まあ大きな声で泣いてくれたの？元気があっていいね。こっちまで元気になりそうよ」と私の背中を優しく撫でてくれた。涙が出てきて、何度もご夫婦に頭を下げた。

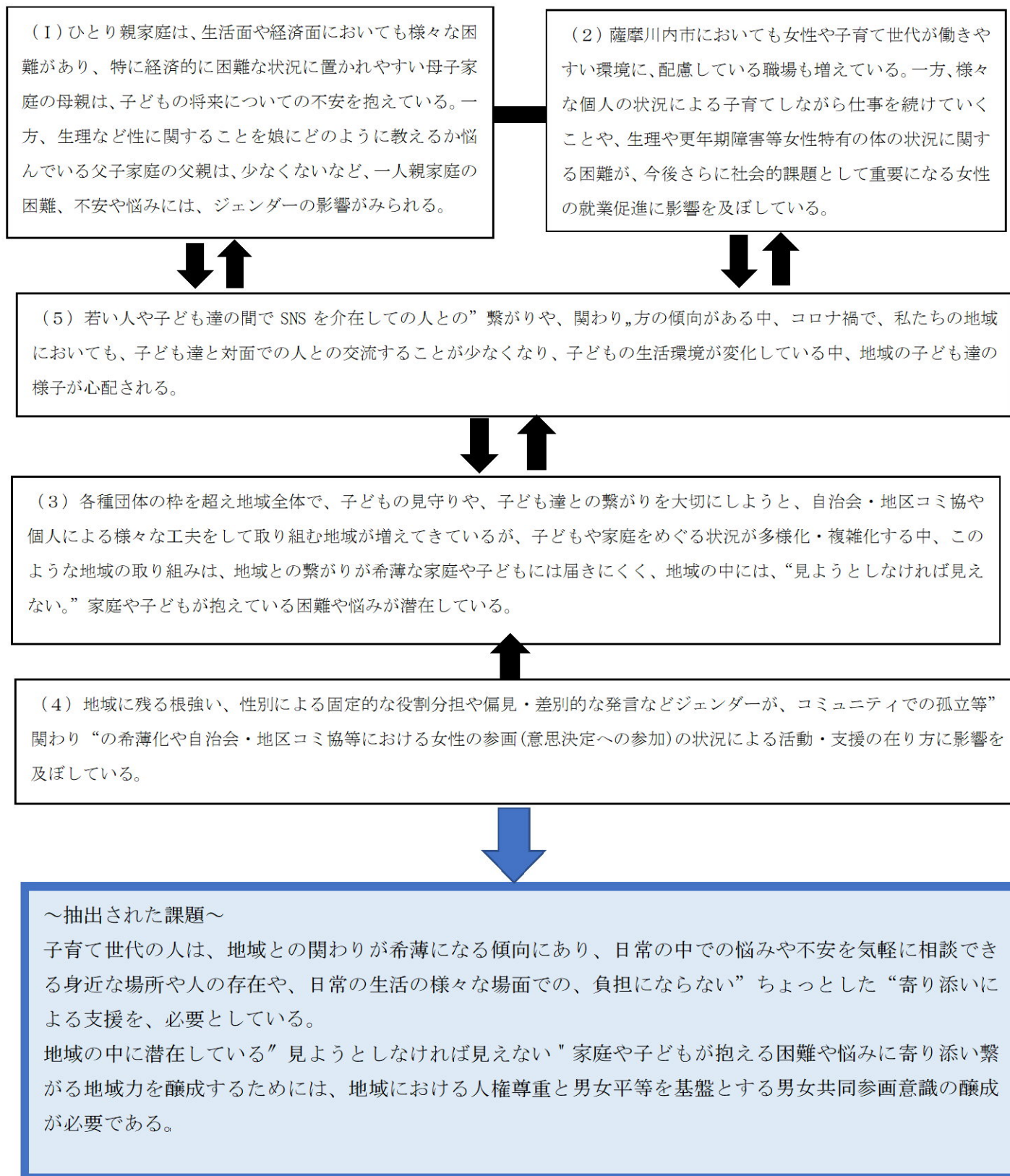
・天気が良かったので近くの公園に散歩に行った時。同じく散歩中の年配の女性が、娘に声をかけ手を振ってくれた。娘は機嫌よく声出して笑った。年配の女性は、「いつもママが笑いかけてくれているから、素敵な笑顔が自然と出るのよね。」と言ってくれた。思わず照れてしまったが、とても嬉しかった。

・スーパーに入る前からぐずっていた娘は、店に入るころから泣き出しました。早く買い物を済ませようと焦っているのが分かるのか泣き声は大きくなるばかりでした。レジで周りに気をつかいながら並んでいると、先にレジを済ませた年配の女性が、「レジを終わるまで、抱っこしていい？」と、娘を抱きかかえてくれ、あやしてくれました。娘はすぐに泣き止み、私はレジを済ませることができました。お礼を言って娘を受け取ると、「赤ちゃんのにおいって、自然に笑顔になれるよね。こっちこそありがとう」って言ってもらえました。感謝です。

課題抽出に向けた、現状把握のための図解

資料③

「情報グループ (1) ～ (5) の主な個別情報は資料④に」



資料④

（Ⅰ）ひとり親家庭は、生活面や経済面においても様々な困難があり、特に経済的に困難な状況に置かれやすい母子家庭の母親は、子どもの将来についての不安を抱えている。一方、生理など性に関することを娘にどのように教えるか悩んでいる父子家庭の父親は、少なくないなど、一人親家庭の困難、不安や悩みには、ジェンダーの影響がみられる。

●私の知り合いの母子家庭の人は、子どもを学習塾などに通わせることが経済的に難しく高校・大学進学に影響が出るのではと心配している。

●ひとり親の方が、子どもが自分や祖父母の抱えている生活状況の悩みに気を使って、自分の気持ちを言えずにいると心配している。

●私たちの身近にも、自分が働けなくなった時や、子どもの病気や介護などで長期休暇が必要になった時などに、生活面や経済面で困難な状況に置かれることに不安を抱えている一人親世帯の親がいる。

●私たちが話を聞いた母子家庭の中には、仕事をしていても、実家の親からの経済的援助を必要とし、仕事をするために実家の親に子育てを助けてもらっている状況がある。

（２）薩摩川内市においても女性や子育て世代が働きやすい環境に、配慮している職場も増えている。一方、様々な個人の状況による子育てしながら仕事を続けていくことや、生理や更年期障害等女性特有の体のからだの状況に関する困難が、今後さらに社会的課題として重要になる女性の就業促進に影響を及ぼしている。

●私の職場には「生理休暇」を取りやすい環境にないため、生理痛で辛くても休めずにいる女性がいる。また、人手不足の状況下で休むとかわりの人がいない為、休んだ分の仕事の量が、後日の仕事に加わるため、休みが取りにくい状況にある。

●私の職場には、「生理休暇」を取りやすい環境にない為、生理痛がひどくても休めずにいる女性がいる。

●近所の中小企業の社長さんは、子育て中の従業員が多い為、会社に保育施設の併設を考えてはいるが、会社の経済的理由や、保育士不足などで、保育施設の併設が困難な状況にあると言っていた。

●私が話を聞いた子育て中の母親は、家族から「子育ては、母親がするものだ」と言われ仕事を辞め専業主婦になった。

●私の地域にいる不登校の子どもを抱えている母親は、できるだけ子どもと一緒にいる時間を取りたいと思っているが、仕事を休めばその分所得が減り、生活が苦しくなるため、休みを取りにくい状況にある。

（３）各種団体の枠を超え地域全体で、子どもの見守りや、子ども達との繋がりを大切にしようと、自治会・地区コミ協や個人による様々な工夫をして取り組む地域が増えてきているが、子どもや家庭をめぐる状況が多様化・複雑化する中、このような地域の取り組みは、地域との繋がりが希薄な家庭や子どもには届きにくく、地域の中には、“見ようとしなければ見えない。”家庭や子どもが抱えている困難や悩みが潜在している。

●私の地域のコミ協では、地域全体での子どもの見守りを目指しており、コミ協だよりを通じて子どもたちの通学路や通学時の写真などを載せ、地域内での子どもの見守りの意識付けをしている。

●私の近所には、登下校の生徒の中に、汚れ、ほつれやボタンが取れそうな制服を着た子どもたちがいることを気にかけている人がいる。

●私の住む地域では、地区コミを中心にスポーツ交流や学寮、夏休み寺子屋など大人と子どもたちとの異世代交流を行っており、地域の子どもたちは地域で育てようという意識がある。

（４）地域に残る根強い、性別による固定的な役割分担や偏見・差別的な発言などジェンダーが、コミュニティでの孤立等”関わり”や自治会・地区コミ協等における女性の参画(意思決定への参加)が進まないことに影響している。

●私の自治会では、自治会役員が決まらず、見かねた女性が手を挙げたが「女には難しいから」「かわいそうだから」と、結局男性の中から役員が決まった。

●私の地区の自治会では、班長は世帯主がすることになっているが、実際には妻が班長の仕事をして、班長会にも妻が出る為、夫は自治会のことはほとんど分からない状態で、班長を終えるという状況にある。

●私たちの自治会では、役員決めの際、「会計なら」と申し出た女性がいたが、「女のくせに」と陰口を言われ、その後、地域から孤立している女性がいます。

●私の地区の男性は、持病を持っていて体力がないため、自治会の行事の草払いの仕事や、川掃除の仕事の際、簡単な仕事をしていると、「男のくせに、だらしないね」と言われ、それ以降自治会の行事に出て来なくなった。

（５）若い人や子ども達の間で SNS を介在しての人との”繋がりや、関わり”、方の傾向がある中、コロナ禍で、私たちの地域においても、子ども達と対面での人との交流することが少なくなり、子どもの生活環境が変化している中、地域の子ども達の様子が心配される。

●国立成育医療センター・コロナ X 子どもアンケート第 1 回調査報告書(NHK2021.9)によるとコロナ禍でストレスを感じている 70%・学校に行きたくないことがあった 38%となっていたが、私の地域でも、不登校や、親の付き添いがないと登校できない児童が増えている。

●地域で学習支援を行っている人は、コロナ禍、感染リスクを避けるために、児童が参加しなくなったことで、学習がきちんと出来ているか気にしている。

●地域の保健師さんが、子どもの身近にいる親や保育士、先生が日常マスクを付けた生活が続き、表情が分かりづらいことで、幼児、児童自身の表情も乏しくなっていることがあると話していた。

女性チャレンジ委員会の活動を振り返って

彩雲グループ

家村 純子

私は、グループの皆さんが豊富な経験や、地域で活躍されていて、それぞれの地域を思う気持ちの強さに、内心「この2年間で、まとまっていくのか？」と、本当に心配でしたが、チャレンジ委員会や自主学習会を重ねていくうちに、「そうだよね」と人の意見を聞く言葉が出始めたことに驚きました。

皆さんの根本にある「コロナ禍、地域の人たちの繋がりが希薄化していることの気がかりや、困難を抱えている人たちが、ますます孤立している事への心配」など「何とかしたい。してやりたい」という強い思いでした。また、私たちが何か行動を起こそうとすると出てくる、性別による固定的な役割分担意識の厚い壁。令和7年4月で、20年となる「男女共同参画宣言都市 薩摩川内」これをきっかけに「男女共同参画」の意味の理解だけではなく深く浸透させていくことで、これからの薩摩川内市が、もっと住みやすい、心豊かな市になるという思い。この2つを、事業として挙げられたこと自体、とても嬉しく思いました。

最初は、どうなるかと心配したこの彩雲グループですが、気が付けば、この6人で最後まで一人もかけることなく来れたことに、皆さんに感謝です。せっかくですから、学ばせていただいたチャレンジ委員会の他のグループメンバーとも関わりながら、また、これまでのチャレンジ卒業生の皆さんにも声をかけさせていただき協力をもらいながら、私たちにできることから少しずつですが事業を進めていきたいと思います。

しかし、もっと若い人たちにこのような学びの場へ、どんどん参加して、学んでもらいたいと思います。気軽に参加できる場があればいいですね。

最後に、たもつ先生には、毎回素敵なアドバイスをいただき、何度も相談に乗っていただきご苦勞をおかけしました事、本当に感謝しかありません、ありがとうございました。

第9期薩摩川内市女性チャレンジ委員会 地域づくり事業の提案

(菜の花グループと Sunny グループの共同グループ)

菜の花グループ：内山、藏治、中潟、福元、細田

Sunny グループ：銭原、玉利、早瀬、米良、本、山之内

私たちが提案する地域づくり事業

「“共助の力を高める” 地域コミュニティづくりアップデート事業」

～各地域、各世代等を超えて誰もが尊重され、それぞれの思い、悩み、考えが言える

・声を聞いてもらえる信頼関係・共感関係のある場づくり～

●地域づくり事業の提案に至った調査研究の経緯

○調査研究テーマの設定→○現状把握のための情報収集（参考資料：P 37、P 38 参照）→
○情報の点検（意見情報から事実情報への修正）→○情報の分類→○情報の分析（参考資料：“現
状把握～課題抽出の図解”、P 36 参照）→○課題の抽出→○課題解決のための地域づくり事業の
立案

●私たちのグループの調査研究テーマ

・菜の花グループ 「地区コミュニティにおける女性の活動について」

私たちのグループでは、子育てしているメンバーから、昔ながらの慣行や地域活動での女性の
あり方が子育てに影響している体験が語られるなかで、身近な暮らしの場である地域コミュニ
ティにおける女性参画（意思決定への参加）が進まない現状と、その影響について考えたいとい
うことから、「地区コミュニティにおける女性の活動について」というテーマを設定した。

・Sunny グループ 「コロナ禍の“行事”のありかたにみる地域コミュニティの状況」

私たちのグループでは、コロナ禍で地域の行事が無くなり負担が減って良かった、一 方、無
くて残念だったというメンバー同士の会話から「地域における行事のありかた」を考え、次第
に、そのありかたが、多様化・複雑化する地域課題の解決に向けて要請されている“共助”によ
る地域コミュニティにおける活動のありかたに影響していることについて考えるようになり、
「コロナ禍の“行事”のありかたにみる地域コミュニティの状況」というテーマを設定した。

・菜の花グループと Sunny グループの共同による調査研究～提案

菜の花グループ・Sunny グループは、テーマが、地域コミュニティに関することで共通してい
ること、菜の花グループのテーマは、本市における男女共同参画の推進に要請されている重要な
課題であり、Sunny グループのテーマにおいても“男女共同参画の視点”でのアプローチは重要
であることから菜の花・Sunny 共同グループとして調査研究を行い、地域づくり事業の提案に至
った。

●本事業の趣旨

地域課題が多様化・複雑化する中、私たちの身近には、子育てや介護等に困難をかかえている人、地域で孤立している人、生活困窮の状態にある人、ゴミ出し等の日常生活に支障を来している人など暮らしに近い地域コミュニティ(自治会・地区コミュニティ協議会)に要請される「共助」による「生活支援」を必要とする人がいる。私たちのグループで当初から共有された、このような問題意識は、これまでの「女性チャレンジ委員会」においても繰り返し提起されており、依然として根強い固定的な性別役割分担意識に基づく女性の活動のありかたや女性の参画(意思決定への参加)が進まない状況による地域コミュニティ活動への影響ということからも問題提起されている。

このような問題を踏まえ、私たちは、調査研究活動を通して、自治会や地区コミュニティ協議会によるコミュニティ活動が、所謂「行事消化型」の傾向にあること、「行事消化型」の活動においては、行事やイベントを実施することが目的化している傾向にあることを再認識した。また、コロナ禍で地域の行事やイベントが中止されたことについての様々な声を聴き、行事やイベントの本来の目的が、住民同士が知り合い、つながる関係をつくり「共助の力を高める」ことであること、その手段としての行事やイベントのありかたについて考えることの重要性を再確認することができ、以下の課題を抽出した。

●調査研究により抽出された課題

- 1, 「共助」の場としての地区コミュニティ協議会における住民一人ひとりの多様な生活上の困難に対応できる「生活支援型サービス」提供の充実
- 2, 自治会・地区コミュニティ活動における、「共助」の力を高めるための意識の醸成を図る学習機会の提供

また、私たちは、世代やライフスタイルが違う等、多様性のある「女性チャレンジ委員会」のグループワークにおいて、多様な考えや意見を聞くことが刺激となって自分自身を成長させるということと、改めて、「女性の参画」の意義を認識し、将来を見据える地域コミュニティの持続可能性という観点からも、人権・男女平等を基盤とする男女共同参画の視点でダイバーシティ(多様性)を推進することの重要性について実感した。さらに、私たちの当初からの問題意識であった、地域コミュニティ活動における「共助による生活支援の必要性」について、女性をはじめ多様な人の参画により「共助の力を高める」ことが求められることを、調査研究活動を通じて確認し、そのためには、私たちが「女性チャレンジ委員会」で実感した、まず、地域、性別、世代等を超えて、誰もが尊重されそれぞれの思い、悩み、考えが言える、声を聞いてもらえる信頼関係・共感関係の中で、語り合い、学び合う場づくりが必要と考え、その取組を基盤とする「〃共助の力を高める〃地域コミュニティづくりアップデート事業」の提案に至った。

●本事業の内容

○事業の実施主体

私たちのグループのメンバーをはじめ、人権・男女共同参画・コミュニティづくりを学んだ「女性チャレンジ委員会」のこれまでのメンバー、本市の「鹿児島県男女共同参画地域推進員」有志による「地域コミュニティづくりアップデート研究会」

・これまでの「女性チャレンジ委員会」においても、地域コミュニティのありかたに関する提案がなされており、それに基づき、これまでも個々の実践としてチャレンジするメンバーはいるが、依然として固定的な性別役割分担意識に基づく地域コミュニティの慣行等による“壁”がある中、「女性チャレンジ委員会」に蓄積される地域コミュニティに関する学びが、十分に活かされているとは言えず、“孤軍奮闘”の状況に置かれる場合もある。このような状況に、私たちは、個々の実践を組織化する必要があると考え、本事業の実施主体を「地域コミュニティづくりアップデート研究会」とする。

○取り組みの内容

- 1, 「地区コミュニティ協議会」の地区に暮らしている人を対象に、自治会加入・未加入を問わず誰もが、地域とつながる場・機会をつくる。
 - ・潜在する「生活支援型活動」の種であるちょっとした身近な困りごとのつぶやき(困っています。助けてくださいと言える受援力)が引き出される信頼と共感に満ちた場。(このような場であるためには、「女性チャレンジ委員会」で学んだ人権・男女平等を基盤とする男女共同参画マインドが必要)
- 2, 1の場や機会により聴く悩みや困りごとの中で、公的な支援が必要なケースについては、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、市の担当課等につなぐ。
 - ・「サービスを必要とする人が、必要なサービスにつながっていない」ために、生活上の困難をかかえている人が潜在化し、潜在化により深刻化する状況改善の一助とする。
- 3, 地域コミュニティの“共助の力を高める”アップデートの基礎となる人権、男女共同参画、制度や役割等地域コミュニティの基本について、地区コミュニティ協議会単位での身近な学習機会をつくる。
 - ・情報収集等調査研究活動の過程で、自治会と地区コミュニティ協議会の関係等の制度や地域コミュニティが担う役割について十分に周知・理解されていないことが、一部の人だけで物事が決まる・役員のなり手がいない・行事が多い・一部の人に負担がかかっているなどの不満につながっていること、このような状況の改善には、地域みんなでコミュニティについて学ぶ共同学習が必要であることを確認した。(私たちは、チャレンジ委員会で、問題意識を共有する“共同学習”の必要性を実感した。)
 - ・地域コミュニティにおける女性の参画の必要性を学び合い、女性の参画促進を図る。
 - ・1の場や機会のみならず、できるだけ多くの人のいろいろな声を聴く手段として、特に若い世

- 代に親和性の高いインターネット上の掲示板等 SNS の活用についての学習・研究を行う。
- ・市の男女共同参画・地域コミュニティ担当部署との協働により実施する。

●事業計画

【短期：数か月～1年】

- ① 実施主体となる「地域コミュニティづくりアップデート研究会」の立ち上げ
 - ・今期の女性チャレンジ委員会における参加メンバー募集(プレゼンテーション時)
 - ・これまでのチャレンジ委員会メンバーへの参加案内の働きかけ
- ② 市の男女共同参画・コミュニティ担当課と共同についての協議
- ③ 「地域コミュニティづくりアップデート研究会」発足の会実施
 - ・本事業の趣旨説明・各メンバーとの情報交換と交流
- ④ 本事業を実施する地区コミュニティ協議会(※モデル地区)の選択、働きかけ
 - ※メンバーが所属する地区に、ゴールド集落もあるが大きな企業もあり、そこには、地域活動への参加意欲のある働く人、転入して間もない子育て世代、独居・閉じこもりの高齢者、退職後Uターンの人等移住してきた人、また今後は企業による外国人雇用が行われ地区内への受け入れが想定されるなど、多様な人々が住む地域がある。
- ⑤ モデル地区役員等への本事業の説明、住民説明会の実施
- ⑥ 「地域コミュニティづくりアップデート研究会」第1回「公開講座」の実施
 - ・研究会のメンバーの力量形成を図るために実施する定期的研修の第1回を研究会発足の情報発信に併せて、地域コミュニティづくりへの広く市民の関心を高めるために公開講座とする。
 - ・研修に併せて「地域コミュニティについて語ろう会」を実施
- ⑦ 定期的な「研究学習会」の実施
 - ・調査研究による学習課題～地域コミュニティにおける「共助による生活支援」の実践、行事の見直し、地区コミュニティ協議会や自治会の女性部の活動目的や内容、女性の参画促進等本市における地域コミュニティのありかたに関する課題と展望について、人権と男女平等を基盤とする男女共同参画の視点に立った調査研究を行う。
 - ・研究会メンバーの他、調査研究による学習課題に関心のある人の参加も呼び掛ける。
 - ・調査学習の内容をデータベース化
- ⑧ 研究会のメンバーが身近な場所で地域活動等に参加
 - ・参加した感想等のデータベース化
- ⑨ モデル地区における「つながりサロン:こけきやん」の実施
 - ・高齢者、子育て中の人、外国の人、退職後Uターンの人等移住してきた人など多様な人々が、隣近所のように細かい単位でも集まることができる範囲でお茶のみができる場を、年間複数回実施する。
 - ・研究会とモデル地区の共催で実施し、会話があっても黙っていてもよい時間を一緒に過ごすことで日常の悩みや困りごとがつぶやかれる雰囲気づくりが大切。(県の男女共同参画の視点に立った地域コミュニティづくり事業)の委託を受けて本市が実施した「つんつんカフェ」において、

このような場の有効性が実証されている。)

- ・悩みや困りごとに関する行政サービス、専門的な相談が必要とされている場合は本人の意思を確認した上で市の関係課等に適切につなぐ。

- ・実施後『振り返り』を行い、悩みや困りごとの状況やその対応等について検証しデータベース化する。

- ・複数回実施後、『つながりサロン：こけきやん』の実施により把握された悩みや困りごとをモデル地区に報告(コミュニティ活動に反映してもらえるよう)

⑩ ⑦・⑧・⑨のデータベースを基に、次年度の活動につなげる「研究学習会」の実施

- ・集積されるデータの市民への発信機会をつくるとともに、市のコミュニティ施策に反映されるよう、データベースを基にした研究内容について担当課との情報・意見交換を行う。

●連携・協働が想定される市関係課・団体・個人等

- ・市～男女共同参画・地域コミュニティ担当部署

- ・市～関係各課(社会調査のデータ等情報収集の協力、スキルアップの研修等の情報提供等活動する上で必要が生じた場合)

- ・団体～地区コミュニティ協議会、自治会、各地域で開催されている社協や自治会のサロン、鹿児島市小原町の「さわやかおはら」会や「ざっそうクラブ」、甕島の中学生の独居の掃除ボランティア団体等事例研究の協力

- ・個人～民生委員・児童委員、健やか支援アドバイザー、自治会長、地区コミュニティ協議会の会長(役員)、モデル地区の住民、自治会サロンに参加している立場の人。地域コミュニティづくりに関心のある人

参考資料

- 調査研究の内容

- 現状把握のための情報収集(資料 P 3 8・P 3 9)

- * コロナ禍の地域行事・イベント等の中止・開催について地域の人々の声を収集

- * 隈之城地区の小学校 P T A保護者を対象に、コロナ禍における地域・学校行事、子ども会活動等についてのアンケート調査(自由記述)

- * 地域コミュニティ(自治会・地区コミュニティ協議会)における女性の活動の状況についての情報収集

- * 市環境課にゴミ分別収集に関わる事、自治会のゴミステーションの管理などについてヒアリング

- * 市防災安全課に市の指定避難所となっている地区コミュニティセンターのトイレの見取り図についてヒアリング

- * 市給食センターに給食費の集金方法についてヒアリング

- * メンバーの所属している地区コミ範囲外に住む自治会員が地区コミ主催の自主学級へ参加する場合の月謝の追加負担分についてメンバーの知り合いの市議会議員にヒアリング

●社会的情報の収集と学習

＊「薩摩川内市自治基本条例」の学習により、地区コミュニティ協議会制度における自治会の位置づけ、地区コミと自治会の関係について確認

＊各メンバーが属している自治会、地区コミュニティ協議会の規約や決算書により自治会は、自治会加入世帯から自治会費を徴収し、地区コミュニティ協議会に自治会加入世帯数×@円、若しくは、自治会住民人数×@円の金額を毎年度支払っている。地区コミュニティセンターは市から世帯数に応じた管理・運営費が出ていることを確認。

＊「薩摩川内市 自治会運営の手引き（令和４年度版）」により自治会の状況（７０歳以上の人口割合が、５０％以上の自治会区域が８４自治会（令和４年１月１日現在））、加入世帯数、運営状況、自治会交付金・補助金等の制度について学習

＊県男女共同参画室「Ｒ３年度かごしま男女共同参画の現状」により、自治会組織の代表者における女性の割合を確認（Ｒ３年４月１日現在、鹿児島県：６．８％、全国：６．３％、本市：６．１％（５５７自治会のうち女性の自治会長は３４人）・地区コミニ会長４８人のうち女性は０人（薩摩川内市Ｒ４年５月：４８地区コミュニティ協議会会長会議）

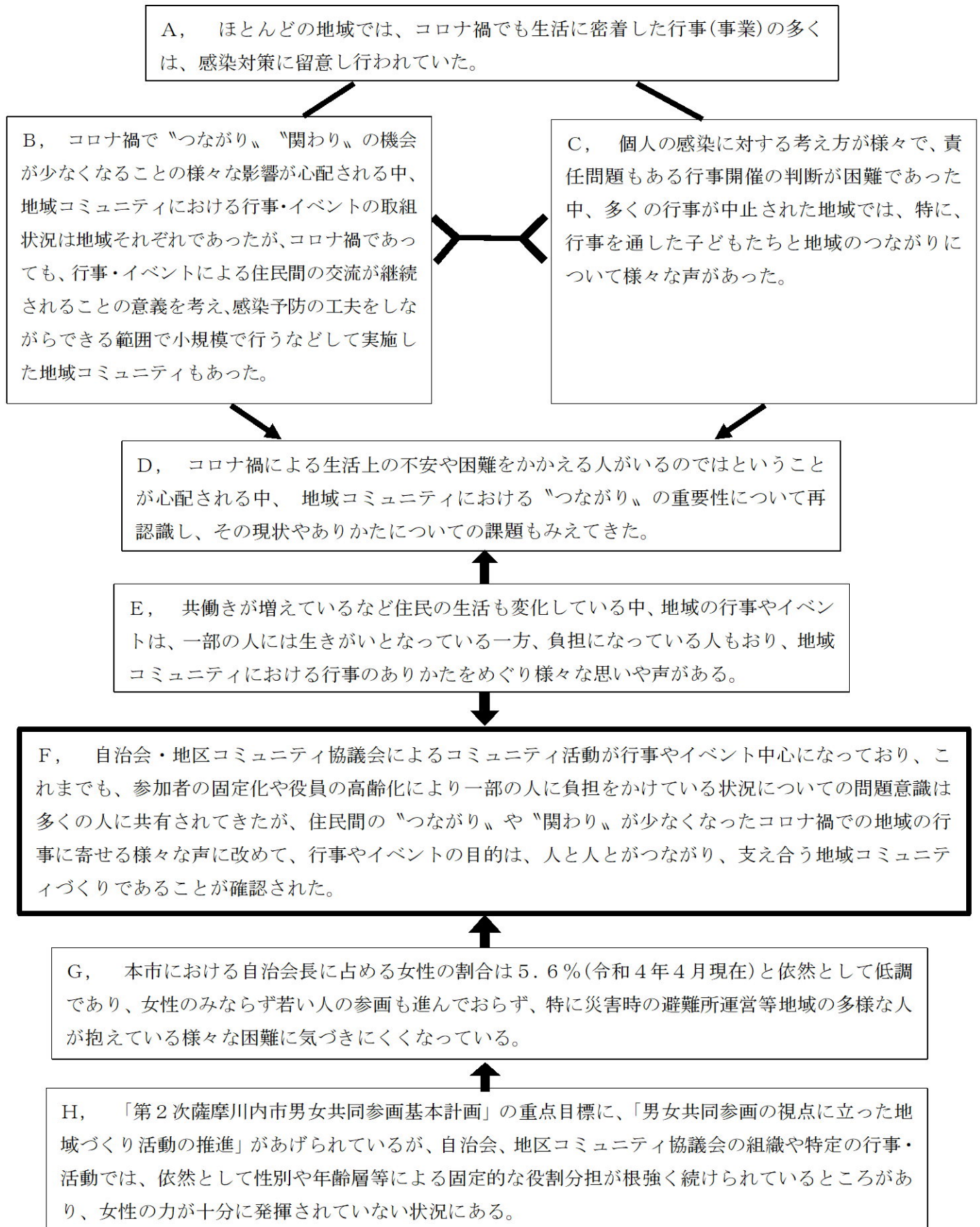
＊薩摩川内市ホームページにより「健やか支援アドバイザー」の役割、活動状況等について確認

＊Ｒ４年１月２８日、社協による薩摩川内市つながり発表会における・喜入地区（有償ボランティア、支え合いマップ見守り活動、アプリ開発で市と協働）・祁答院地区（湯之元自治会、年末の蕎麦の振る舞い、市安心安全のまちづくりの補助金で活動）・上甕地区（空き家活用で、はんとけん体操＋サロンの取り組み）について学習

＊「薩摩川内市避難所運営管理マニュアル」（平成２５年７月、薩摩川内市総務部防災安全課）の学習により、：各避難所の防災用品の生理用品配備状況等避難所運営における「男女共同参画の視点」について確認

課題抽出に向けた、現状把握のための図解

(調査研究テーマの現状として把握されたA～HはP 3 8・P 3 9の個別の情報が集約されたものです。)



○収集した主な情報

A ◆コロナ禍においても、私の自治会では資源ごみの当番は中止されなかった。早朝から約1時間、リサイクル当番の十数名が集合し自治会員の持ってくる資源ゴミが正しく分別されているかどうかの確認をしていた。◆私の地区コミュニティでは、コロナ禍で行事が次々に中止となっているが、生活に直結する清掃活動、防犯パトロール、災害時等における児童生徒引き渡し訓練、地域防災連絡調整会議等は参加者の健康管理や三密の回避など感染対策をとり、内容を見直しつつ工夫しながら実施されている。等

B ◆私の地域では、地区コミ主催の暮れ市があり、屋外での開催だったので、大勢の参加があった。久しぶりだったので楽しかった、元気をもらったという声やコロナ感染状況が落ち着いてきたら、感染防止対策と工夫をしながら行事・イベントを実施して欲しいという声が多くあがった。◆私たちの地域の高齢者は、コロナ禍でも同世代で隣近所集まって談笑することが大事と考え、地域のサロンなどを再開したほうが良いという意見がまとまり、感染予防対策を行いながら実施している。等

C ◆コロナがコントロール下になれば、今までのように行事をしてもいいのではないかと。子どもの成長を見たい。子供の成長を見守る機会を減らしたくない。季節を味わうことのできる体験を子どもにさせたい、という親の意見があった。◆甌島にある私の地域の海岸清掃活動は、屋外の活動なので感染対策をすれば実施できたのではないかと思う人もいたが、「何かあったら誰の責任になるのか。」と、感染の発生があった場合を恐れ中止になった。等

D ◆私達の住む地域では、自治会加入者か、未加入者であるかどうかで、子どもや独居老人の見守り支援、地域の美化、防犯、防災活動などの対象としての差別化がある。◆自治会のゴミステーションは維持管理に一部公費が入っており、クリーンセンターへの運搬には税金が使われているにもかかわらず、自治会に加入・未加入による市民サービスの公平性ということについての疑問の声がある。等

E ◆自治会の行事は共働き世帯で負担が大きすぎると感じる。地域の運動会は廃止または縮小してほしい。子どもが喜んでいない。学校の運動会だけで十分という児童保護者の意見があった。◆私の住む地域行事や学校行事が軒並み中止となり自分の時間の余裕が生まれた。家族との時間をゆっくり持てるようになった。◆コロナ禍で行事が一斉に中止となった今の生活に慣れると、地域行事や子ども会の活動は再開しなくてもいいのではないかと考えている。行事運営の役員決めや役員になった人の負担が大きき気まずいため。一方、コロナ禍でも学校行事はしてほしいという意見があった。等

F ◆私の自治会の地域行事がコロナ禍で減ることにより、近所に住む子ども達の顔がわからなくなっている。行事での交流をきっかけとして地域住民で子育て応援や子どもの安全の見守り活動が維持できていたことがわかった。◆私の地域では、毎年恒例の夏祭り、それに付随する集まり等ひと夏の間に行事が多く、運営役員も参加者も負担が大きかった為、コロナ禍で一斉に行事が中止となり家族で過ごす時間が持てた、と思う人もいれば、地域行事で近隣住民の交流がなくなると災害時の助け合いの時に知らない人同士でどうするのか？という意見もあった。等

G ◆私が住む地域では、若い人や女性が、コミュニティ活動への意見を言えない雰囲気がある。◆私が住む地域では、以前、女性や若い人が行事に対する意見を述べると突っぱねる地域の会長がいたが、その会長の思いとしては、いろんな人の意見を聞き入れると行事の運営が面倒臭くなる、とのことであった。◆私の住む地域では、「イベントに対する発案をしてもあまり若い世代の意見は受け入れられず、自ら進んでほしいと思うのではなく、やらされている若しくはただの手伝いなのでやりがいを感じられない。」という若い世代の人がいる。◆私たちのコミュニティ協議会の防災用品の備蓄の中に生理用品がないことがわかった。◆市の指定の避難所となっている私の地区コミュニティセンターのトイレは男女が一緒である。等

H ◆私の自治会では昔からある程度、性別により役割を分けた方が活動に参加しやすいという仕組みとして、男性は草刈り、女性は行事の食事の賄いや屋内の掃除というふうになっている。◆私の自治会

では、年上の人から順に会長と副会長をペアで行う輪番制になっている。女性の自治会活動での役割は、花見や敬老会、サロンなどの準備や後片付けとなっているが、特別苦情は出ていない。◆私の地域では、花見などの行事の際は、女性が焼酎のカンを付けた瓶を用意し、おつまみの準備をする。宴会の片づけはみんなで行うが、中心となるのは女性部である。◆本市は、民生委員や自治会の健やか支援アドバイザーに女性が多い。その理由は、地区コミュニティや自治会によっては、高齢者サロンの担当者を兼務させているため。高齢者サロンには、皆で楽しく食事をしたいという参加者が多い。”給仕”を担う＝”女性” という自治会内での意識が強いため、必然的に女性が健やか支援アドバイザーになっている状況がある。等

女性チャレンジ委員会の活動を振り返って

菜の花グループ

中潟 ヒミ

今回、薩摩川内市女性チャレンジ委員会に参加しまして、甌島からの日帰りの会は大変で、最後の会も時間がおしてしまい記念写真にも参加できませんでした。今後の会では、甌島から参加している人たちに対しての時間の配慮などを考えていただければと思いました。

また参加者が少なく（それぞれ体調や仕事などの理由はあったのですが）女性チャレンジ委員会の意味があるのか（私を含め）とも感じました。

私たちの「菜の花グループ」は慣れない人ばかりで「Sunny グループ」さんに助けていただき感謝しています。

会に参加した中で、各地域の抱えている問題や現状を知る事もできました。それぞれのグループの研究発表の内容（調査・情報収集・課題対策）が市や地域づくりに反映されることを願っています。

グループワークアドバイザーのたもつ先生には異なる研究内容に対して多大な時間と労力をお使いいただき、素晴らしい研究発表ができました。たもつ先生のお人柄にふれ、楽しく参加できました。ありがとうございました。

この会を機に、私も学んだ事を生活の中で活かしていければと思います。

Sunny グループ

山之内 香織

私たち「菜の花」と「Sunny」は女性チャレンジ委員会で初となる2つのグループの共同グループとして活動してきました。年齢、性格、環境も違うメンバーでしたが、共通の問題意識の中で多様な考えや意見があり、自分自身を成長させるとともに有意義な調査研究を行うことができました。

各地域、各世代を尊重し、それぞれの思い、悩み、考えが言える。声を聴いてもらえる信頼関係のある環境や場づくりの大切さも学びました。

“共助の力を高める”地域コミュニティづくりアップデート事業を推進すべく、同じ思いを持ったメンバーとこれからも一緒に活動できればと思います。

薩摩川内市女性チャレンジ委員会活動経過（第9期）

令和3年度

第1回全体会	7月 1日（木）	SSプラザせんだい
第2回全体会	10月 7日（木）	市役所会議室
第3回全体会	11月18日（木）	セントピア
第4回全体会	12月14日（火）	SSプラザせんだい
第5回全体会	1月18日（火）	SSプラザせんだい
第6回全体会	3月16日（水）	SSプラザせんだい
○現状把握のための市役所関係課ヒアリング 環境課、障害・社会福祉課、子育て支援課		

令和4年度

第7回全体会	4月19日（火）	SSプラザせんだい
第8回全体会	5月19日（木）	SSプラザせんだい
第9回全体会	7月20日（水）	SSプラザせんだい
第10回全体会	8月18日（木）	SSプラザせんだい
第11回全体会	11月16日（水）	SSプラザせんだい
第12回全体会	12月16日（金）	SSプラザせんだい
第13回全体会	1月18日（水）	SSプラザせんだい
第14回全体会	3月 8日（水）	SSプラザせんだい ※事業提案報告会

※2年間に各グループ自主学習を数回開催しています。

第9期薩摩川内市女性チャレンジ委員会

【グループ別：五十音順】

グループ名	氏 名	地区	備考
彩雲	イエムラ ジュンコ 家 村 純 子	可愛	リーダー
	イワイデ ハツヨ 岩 出 初 代	副田	
	オクゾノ カズコ 奥 園 和 子	樋脇	
	タバタ トモコ 田 畑 智 子	永利	
	ホリウチ リツコ 堀 内 律 子	平佐西	
	ヤナギ ユウコ 柳 裕 子	東郷	副リーダー

グループ名	氏 名	地区	備考
パレット	ウチノ タズヨ 内 野 多 津 代	斧渕	
	カシワギ トモコ 柏 木 朋 子	川内	リーダー
	カワジ セツコ 川 路 攝 子	可愛	
	カワバタ マコト 川 畑 真 琴	上甕	
	ナカマタ ヒトミ 中 俣 ひ と み	高来	
	ヒラノ シホミ 平 野 志 穂 美	企業推薦	副リーダー

グループ名	氏 名	地区	備考
菜の花	ウチヤマ サヨコ 内 山 小 夜 子	峰山	
	クラジ サトコ 藏 治 里 子	城上	副リーダー
	ナカガタ ヒミ 中 潟 ヒ ミ	下甕	リーダー
	フクモト コズエ 福 元 こ ず え	平佐西	
	ホソダ ミナコ 細 田 美 奈 子	水引	

グループ名	氏 名	地区	備考
Sunny	ゼニハラ ムツミ 銭 原 睦 美	隈之城	
	タマリ あづみ 玉 利 あ づ み	黒木	
	ハヤセ ゆみ 早 瀬 ゆ み	隈之城	
	メラ ヒロコ 米 良 ひ ろ こ 子	平佐西	副リーダー
	モト フミカ 本 文 可	里	
	ヤマノウチ カオリ 山 之 内 香 織	企業推薦	リーダー



第14回全体会(事業提案報告会)
発表されたチャレンジ委員の皆さん